
絶望の少女は第二魔法の担い手と会う

アストレアセカンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶望の少女は第二魔法の担い手と会う

【Nコード】

N7417V

【作者名】

アストレアセカンド

【あらすじ】

ハルケギニア、アルハインツ家に生まれたセリムⅡアルハインツは母が平民メイジであることを理由に家から捨てられた。2歳にしては聡明なセリムだったが、父親のカリオスⅡアルハインツは伯爵家の次女との婚姻のため、邪魔になったセリムを殺害しようとする。

だが、死にかけたところを彼女は救われた。異世界の魔術師、遠坂凜と衛宮士郎に。

セリムは成長と共にハルケギニアに対してのトラウマから力を手

にしたいと思うようになる。

これは、セリムが生きるために絶望を経験する物語である。

絶望から始まる物語（前書き）

注意

このお話はグダグダです。面白くないと思ったらブラウザバックしてください。亀更新、不定期更新です。終わりが見えない、独自設定上等です。あまり文章構成がうまくありません。

ゼロ魔とType - Moonの二次制作です。主にFateですが、いろいろと出てくるのでType - Moonです。別に書いている小説が少々行き詰まっっていて、何か指休め的なことで書いているのがこの小説です。

長編にするつもりですが、基本真面目に書きたいです。二つの作品は二次制作の知識とアニメ、Wikiぐらいしかありません。なにとぞ大きな心で見てくださいと幸いです。

不定期更新、亀更新は当たり前。できたら一気に流します。これは私のスタンスなので了承をば。

設定が気に食わない、こんなの絶対おかしいよ、作者が気に食わないなどとお思いになられましたらブラウザバックで戻ってください。二次制作なので変だとか作品との齟齬だとかは出るので、そこらへんはおおらかにお願いします。

修正

小説本文に間違っって記載したまえがきの一部を修正しました。本当に申し訳ありません。

絶望から始まる物語

私は今日。父に用無しだと捨てられた。

「私の、アルハインツの家名を受け継ぐにはお前の欠陥はひどすぎた。恨むのなら才のない自分を恨むのだな」

父、カリオスⅡアルハインツはそういい放つ。母は数年前に死亡していて、ラインメイジだったことは覚えている。だが顔は思い出せない。私が産まれてすぐに息を引き取り、故人となった。

突然突き出された現実には困惑していると、首根っこを捕まれて否応なしに引きずられる。

「お、お父様!？」

だが、お父様は聞いてくれない。なにも言わず、ただ無言で私を引きずっていくだけだ。地面に当たったお気に入りだった靴がどんどんと汚れていく。

私は今二歳になる。母から継いだとされる銀色の髪と、ふんわりと流れる髪は自慢だった。だが、ことあるごとにお父様は私を気に入らないといい、お母様との痕跡を消そうと躍起になっていた。

後から知ったことだが。お母様はメイジであつたが貴族ではない。いわゆる嫁いだのではなく無理矢理子供を作らされたのである。お父様は女癖が悪かった。一歳の時から自我があつた精神は愚痴るメイドの話を聞いていた。

そして私を捨てた日。お父様は伯爵家の次女との婚姻を結んでいた。

「お父様……私、いらないの？」

閉め出されたドアを見ながら呆然とつぶやく。

家の中では宴会騒ぎになっているとは露ほども知らず。私はいつものお仕置きだと思っていた。お父様は私に気が入らない場合は地下に閉じこめ、腹の空かしたコボルトが檻の中で犇めく所に投げ入れた。

もちろん中は異臭と呼ぶのも可愛いほど。それこそ普通の子供なら近づいてコボルトに食われてもおかしくないような、それはひどい環境だった。

檻の中では常に死肉をねらうハンターがいて、私を襲ってこないのはひとえにそれだけの体力すら残っていないことを示唆させる。むしろ檻の外から眺めるだけだった私には気がつかなかったが、万全な体力があれば我先にと檻に激突し、歯牙を見せながら威嚇体制を取っていたことだろう。

すべてのコボルトは生きるために必死で、仲間の肉を食らって生き繋いでいた。骨をしゃぶり、肉を租借し、唸りながらそれでも食らっていく。

それは食物連鎖の一環だった。弱いものは食われ、強いものは生き残る。

まざまざとそれを見せられた私は最初、失禁しながら気絶した。

いつもと同じ、ただのお仕置き。そう信じていたかった。

「…………お父様……………」

中から楽しそうな声と、きれいな音楽が聞こえてくる。私を追い出した後、すぐさまお家は明るい雰囲気を纏った。メイドは働きだし、執事は忙しそうに準備をする。

「……………私、いい子にするから……………」
だから、お家……………」

嗚咽混じりの悲鳴は楽しい音楽に一蹴される。寂しさよりもただ、胸を抉るような痛みが辛かった。

事実は分かっている。私が出来損ないだから捨てられた。精神力は本来ならあり得ない空っぽで、故に魔法の行使は絶望的だった。

トリステインでは魔法は貴族の位の次に重要視される。未来において半人前にもなれない私は、欠陥品として捨てられる次第となった。お母様はラインメイジ。お父様はトライアングル。最低でもラインは欲しいと考えていたであろうお父様に告げられたのは落ちこぼれの娘だった。

そんな娘は、生きていくだけでお父様の人生の汚点となる。お母様との婚姻は事実上無効だ。だからお母様も私も、『無かったこと』にされる。

「……………お家、入れてよ……………」

誰も私を知らない。見たこともない。それが今日、メイドと執事に父が与えた命令。ただの浮浪児が父の家に乞食としてやってくる。扱いはそれに相当するものでいい。

父にとって、私はもはやいないものだと言われた。

故に、ここにいる私は貴族の娘でも何でも無い、『ただの物乞いの平民』になってしまった。

「さっさと出ていきな!!」

縋るようにドアに呼びかけていた私を料理長が怒鳴りちらす。鬱陶しいとばかりに怒気を上げ、睨むようにこちらを冷たく見下ろしていた。

冷たい、まるで氷のように冷えきった目。侮蔑、軽蔑、怒り。負の感情を詰め込んだ視線はたやすく私を射抜いた。

「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・・・」

あまりの迫力に声さえでない。鼻息を荒くしてこちらを睨むのは昨日まで愛想良くしてくれた人だった。

「全く、鬱陶しい子だね。あんたは捨てられたんだ。早く消えとくれ。作業が遅れちゃうよ」

冷たい双眸が私を見抜いた。有無を言わさない迫力を纏った彼女は、動けない私に近づいてきた。

「こつちはね、あんたみたいな嫌いな餓鬼にもへこへこ頭を下げなきゃいけない商売をしてるんだよ。だけど、あんたがこの娘じゃなくなっただっていうんなら話は別だ。私とあんたの立場は対等。とつとどこかに行っちまいな。餓鬼」

「わ……私、いや、……お家……お家に……かえりたい……」

料理長はため息をはくと、私のお腹を蹴りあげた。息が漏れる。肺が潰れるんじゃないかと思えるほどの力がお腹に襲いかかった。

何発も何発も。軽い体は地面から浮き、鈍い音を立てながら反響する。体の中から音がいくつも聞こえた。

「ああもう！ それを私にいつでも仕方ないだろうが！ もうイライラする餓鬼だね！」

料理長は何度も何度も私を蹴る。

つい数日前に料理長が褒めてくれた銀髪は、料理長に踏まれて土にまみれていた。

喉の奥から沸き上がる不快なものを吐き出す。赤々とした血が、夜になり始めた夕日と相まってよけいに紅く見える。

血を意識し出すと、急激に頭は冷えていった。

青くなった顔で、このままだとどうなるか考える。決まっている。殺されるに決まっている。

興奮して顔が赤く染まった恰幅のいい料理長は私を掴んだ。髪を持ち上げ、腰に首もとにまで延びた髪が、料理長の指に絡まり、力一杯引き上げられる。

悲鳴にも似た声が一瞬でかかった。しかし、声のどを振動させる前に料理長の手の方が数段早かった。声はなにもなさず、ただ空気がして抜けていく。

「色気付いた貴族の娘が、なにも知らない風に平民をあざ笑いやがって……何様のつもりなんだい」

鋭利な何かを思わせる。そんな視線が突き刺さった。睨む視線には殺意が芽生えていて、今まで我慢していた感情のダムが決壊するがごとく。激情に流された料理長は支離滅裂な暴言を吐いてから私を地面に叩きつけた。

「は……ぐっ……」

頭を強かに打ちつけてしまった。脳震盪でも起こったのか、視界がぼやける。目の前の影が一つ二つにぶれ、今どうなっているのか分からなくなった。

軽い体重が幸いしたのか、地面が柔らかい土だったからか。どちらにせよ、私は助かった。

「もう、私をイライラさせるんじゃないよ。出ていきな。元貴族の餓鬼」

バタンと、ガチャリと。彼女はドアを閉めた。散々痛めつけられ、

呼吸すらままならない。幸いにしてだが生きてはいたが、彼女の暴行によってお腹の中がぐるぐると回っていた。

「お、・・・・・・・・うえ・・・・・・・・」

気分が最悪だった。故に吐き出した。ドロドロと消化不良だった昼食が、原型をとどめないほどの形で出てくる。胃液に混じった特有の酸っぱい臭いがツンと鼻をつく。

血が混じったそれは、確かに私が吐き出したモノだった。

消化仕切れなかったパンが、胃液を吸ってひしゃげている。あまりみたくないものから目線をそらす。しかしあたりに漂う酸っぱい臭い是否応なしに臭い、私の意識をそこへと向けさせる。

意識しないように努め、これからのことを考える。私は捨てられた。なにも残っていない。眠るところも、食事すらもままならない。

昨日までとは違うのだ。生きるためには、生きているだけでは死んでしまう。餓死。それともオーク鬼に殺される。それとも山賊に連れ去られて売られる。それとも女だから犯されてしまうのか。

不安だけがぐるぐると頭を巡った。不安だけが、私を支配していた。

生きるためには汚水でも啜らなければ生きていけない。名誉も、栄誉すらも剥奪され、汚らしくも生きていかなければいけない。

ふと目を見上げる。

先ほど吐き出した、パンの一片。これから生きていく上で、もはや口にすることが少ないであろう小麦の塊。

それを、躊躇しながらも手を伸ばす。

口に含むと、口腔が異物を感じ取って吐き気がおそってくる。味は最悪だ。パンを噛めば噛むほど胃液がにじみ出て、より一層吐き気を誘う。

喉を通ったモノが吐き気とともにせり上がってくる。それを無理矢理押し込む。ジャリジャリと泥混じりのパンを、胃液があふれ出てくるパンを、これでもかというほどに詰め込んだ。

情けなさや惨めさが残った。なまじ貴族というものしか見ていない私にとって、外の世界というのはおとぎ話の世界なのだ。

コボルトは見たが、オーク鬼は見えていない。平民がどんな生活を送っているのかすら知らない。ただメイドの愚痴と書物の内容だけが私を精神的に成長させた。

泣きながら吐き出したモノをもう一度飲み込む。最悪の気分を味わった。キリキリと痛むお腹と、胃酸によっておかしくなった喉が惨めさをよけいに強調してくる。

厨房は忙しそうに動いていた。

ドアは依然として堅く閉ざされたままだが、今にも中から料理長がきて殺されるかもしれないという妄想とも断言できない未来予知が広がっている。

とにかく、反対側の森へと急いだ。また料理長にかかると、今度こそ殺されてしまうという確信があった。

口には残飯の残り滓がつき、涙と涎は服を汚している。無心に食べた吐き戻しは服にも付いていて酷い臭気を放っていた。

広く開けた大地。緑が続く道の上を必死になって走り、転けては走ることを繰り返す。一刻も早く、家から逃げたかった。いやな予感が止まらず、背中にはびつしよりと冷や汗をかいている。

森はあと数キロメートル先にあつた。息をすることも忘れて、一気にキロメートルは走った。産まれて初めての全力疾走に肺がビクビクしている。痛いほど動く心臓が内側で大きな音を放っているのみに辺りは静寂に包まれている。

しかし次の瞬間、聞き慣れたといってもいい声が聞こえてきた。

『さあさあ皆さん！　ここで余興をと思いますす！！』

背筋が凍った。拡張の魔法を使ってわざわざこちらに聞こえるように声を放ったのは、父の声だった。もう一キロメートルも離れているとはいえ、見えないものでもない。何せ辺りは漆黒に染まりつつあるとはいっても開けた大地。そこに人間がいればイヤでも目立つ。

『今！　森に向かって逃げている奴隷に、見事魔法を当てた方に、賞金を差し上げましょう！！』

逃げた奴隷。それは私のことだろう。

私を使つた的当て。それを理解するのに時間はさほどかからなか

った。詳しくルールの説明に入ったお父さんは拡張の魔法を消し、私に逃げるまでの猶予を与える。

足は痛い。膝は擦りむけ、血が流れている。筋力の発達していない三歳児にはきつすぎる長距離走。魔法もなにも、抵抗する手段がない私にとっては先ほどの宣言はまさに死刑宣言だった。

逃げなければいけない。ノロノロと立ち上がった私は少しでもと歩き出す。後ろに強烈な悪寒を感じて横に飛び退くと、先ほどまでいた場所には氷のつぶてが刺さっていた。

ウィンディ・アイシクル。まっすぐに飛んできた氷の槍は、私に死を連想させた。

『惜しいですな！ まあ余興です。いたぶってから殺すというものも乙なモノですな！』

本当の恐怖がせり上がってくる。肝まで冷えるような、冷や汗が止まらない感覚を味わった。

家は煌々とした明かりが灯り、その灯りに混じって赤い色が見えた。

ファイアーボール。次の魔法は火らしい。

私の左足をちょうどかすめる程度に飛んできた。操作をしているぶん、先ほどのウィンディ・アイシクルよりもやかいだったのは、地面にぶつかった瞬間に燃え移ったことだ。足には軽くやけどを負い、黒い煙が喉に入る。

のたうち回って涙目になる私を見下している貴族は大いに笑っていた。

下卑た笑いは結構離れているこちらにまで響いてきた。

逃げなければいけないというのに足が動かない。

地面がせり上がり、ゴーレムが形成される。そのゴーレムは石ころを掴んで私の方向に力任せに投げてきた。

命中率は低いが、何度か石が肌を掠る。大きな石が当たったときには簡単に吹き飛び、額には石で切った切り傷からぬらぬらとした血が滴る。

腕にも当たったため、痙攣する腕をもう片方の腕で押さえながら歩く。息は不規則になりがちで歯は力チ力チと震えていた。

何度も魔法が近くを掠る。火は体力を奪い、氷は恐怖を煽り、土は傷を増やしていく。

足はもう限界だった。ガタガタと死の恐怖に耐えかね、失禁してしまった内股に黄色い液体が流れていく。顔は涙と恐怖でだらしくひきつり、震える口からは涎が垂れ流しだった。

明確な死。それを感じた。

一瞬後には死ぬかもしれないゲーム。いや、森にたどり着くこともできずに死ぬだろう。これは逃がすためのモノではなく余興だ。わざと魔法をはずして、観客に楽しんでもらわなくては余興ではない。

二巡目はより精確だった。

一人だけ、炎の魔法を放った人がいた。それは私の頭を燃やし、自慢だった銀髪を燃やし尽くす。

地面に転がり、火を消そうとする様は爆笑を誘っていた。縮れた髪はほとんどが焼き切れ、いやな臭いが辺りに広がる。

ウィンディ・アイシクルが何度も襲いかかり、腕や足に創痕を絶えず与えてくる。

「もう………だめ………」

私の意識は遠くなっていく。足は棒のようになり、一步も動かせなかった。荒い息が耳元で聞こえると思えば、気がついたときには地面に自分が倒れているのだと気がつくのに時間がかかった。

「………はっ………はっ………」

死にたくない。その思いが私を前にと進ませる。こんな惨めな死に方があるか。悔しくて涙が止まらない。

勝手に産み出されて、いらないと分かれば捨てられて。

貴族の見せ物になって、殺されると。

ふざけないで。

「私………死ぬ………いや………いや、いや、いや、

いや、いや、イヤ、イヤ、イヤ、イヤ、いや、いや」

獣に近い、本能に任せた叫び声。その時、何かがカチリと合わさるような気がした。

パズルが組みあがるような。歯車がかみ合うような。

一瞬だけ見えた世界。泡の中。何もかもから守られるように展開する光景。それが水の中の光景なのだと知るよりも早く理解した。そのような世界に、なぜかあこがれを持った。

何人からも自信を包み込む広大な宮殿。脳裏に刻まれるがごとく、その微細は記憶されていた。

だが、そのような妄想は現実には犯され、急激に視界をフェードアウトしていく。走馬燈という奴だろうか。死んだ母の笑顔。ほんの一瞬、それが目を覆う。

「あ・・・・・・・・」

だが、それを切り裂いて飛び込んできたのは色とりどりの魔弾。小さな声が喉から自然と漏れた。

迫ってくるいくつもの光。青に赤に土色のそれ。飛来する形で一斉に放たれたそれは、私の体に突き刺さっていく。

ただ身長が小さいのが効を成したのかウインディ・アイシクルはそれほどは当たらなかった。ただ石は体のあちこちを殴打し、火は地面に広がっていく。

汚いボロ雑巾のように転がった私の中身が出た。血が、どんどん体から流れ、冷たくなっていく感覚が伝わる。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

ヒューヒューと呼吸はせわしく動くが、火を吸い込み、煙を吸い込み。徐々に頭だけは死を受け入れつつあった。

死。覚悟を決めると、それはなんと言ったことでもない気がしてきた。時間の感覚さえ曖昧になる中、虚ろにさまよう視線は焦点すら定まらずぼつと空を見ているだけだった。

星と月の明かりが完璧に今を支配する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう何も考えたくない。どうやってたら生きられるかなんて考えるのも、億劫だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

悔しいな。胸に去来するのはそんな感情だった。

悔しい。ただ悔しかった。力のない自分が、実の父に殺されること。液体という液体が体中からあふれて、汚いまま、泥にまみれて、見せ物にされて。今の自分に腹が立つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゆっくりと、それは落ちてきた。頭を狙った巨大な氷。鋭角にと

がった三角錘は重力に負けて落ちてくる。あれが刺されば、頭はザクロのように吹き飛ぶだろう。

脳漿をぶちまけて地面を汚す。

未来はいつだって、今より悲惨にしかない。なら、そんな未来などいらない。私は今だけが支えた。私は、生きている今だけを、永遠に大切にしたい。

「……………私は、……………こんな、結末、いらない！」

声にでたかも分からない、そんな思い。鋭角に尖った氷の塊は飛来してくる。

だが、私が生を諦め、目を瞑ろうとしたときにそれは見えた。

綺麗な極光が氷を粉々に切り裂いた。つぶてが光に反射し虹色になり、幻想空間が展開されたかのようにイルミネーションが広がっていく。七色の光は破壊を産み、光線となって夜空を両断する。

「大丈夫かしら」

そこには、黒髪の女性と赤銅色の髪を持つ男性がいた。二人の年は大人と呼んでも差し支えないほど。老練の雰囲気を出す男性とは別に、女性はいくまでも女性としてのスタンスを守りながら話しかけてきた。

慈悲深い、優しさあふれる笑顔があった。

「遠坂。早く治療してやれ」

「はいはい、全く。ようやく大師父の宿題が進歩したかと思えば修羅場なんて。どうせ士郎の幸運値が低いせいだわ」

「う……………関係ないだろ」

軽い掛け合いを交わす男女は口調とは裏腹に目線は厳しかった。男性は士郎と呼ばれ、何も無い空間から赤い布と剣を取り出す。

女性は宝石をいくつか取り出し、治療に移る。今まで痛みを発していた部分の痛みは和らぎ、呼吸も安定している。杖も無しに魔力行使を行う様子は、まるで伝承のエルフみたいだった。

「こんな小さな子を、くそ」

「士郎。落ち着きなさい。それでも、私だって腹が立ってるのよ」

女性は治療を続け、男性は迫りくる魔法をはじいていた。まるで勇者みたい、などと戯けたことを考えても仕方ないと思う。これが幻だったとしても、自分の都合のいい夢だとしても。

「……………内部の損壊が激しいわ……………って、この子、まずいわよ！ 士郎！ 早く終わらせないとこの子、死んじゃうわ！ この子を今すぐ抱えて戦線離脱！！」

「ち……………っ、分かった。遠坂、最後にでかいの、かましてやれ！」

「OK！ いくつかわよー！！」

一線。空間が七色の光で覆われる。何度見ても綺麗な光景だった。家は、光線に貫かれ、炎上した。どういう原理で、何を基盤にして、あの光線は作られているのか。

ただ目に焼き付いているのは無骨に積み上げられた宝石から発する光と、優しく抱えてくれる男性の腕だけを感じていた。

絶望から始まる物語（後書き）

不定期に更新していきます。

運命邂逅 1（前書き）

書き溜めていたものを消化します。

運命邂逅 1

SIDE 遠坂凜

遠坂凜は考えていた。もう少女ではなく女性というにふさわしい体つきになり、胸もそれなりに膨らんできた。そろそろ子供も欲しいかしらと士郎に歩み寄り、従者や電話口の妹にそれとなく邪魔される日々が続いている。

そんななか、大師父、ゼルレッチ、シュバインオーグが残した宝石剣を、私たちの悲願を、衛宮士郎完成させた。いや、してしまった。設計図を読みとって8ヶ月目で達成しやがったのだ。

遠坂だけではない。エーデルフェルトも他の大師父の末裔もこの所行を知ったとすれば衛宮士郎を激怒しただろう。

これには泣いた。おもいつきり泣いた。湯水のように使われ散財してきた宝石のために泣いた。

そう。これは剣だった。衛宮士郎が得意とする、剣だったのだ。士郎にかかれば剣の投影で不可能ということは例外を除いて存在しないのだった。英霊の武具でさえ投影する企画外の魔術使いに常識など押しつけてはいけなかった。

うつかりが過ぎる。それが遠坂凜が自分に向けた感想だった。

だがそれはもう過ぎてしまったこと。反省しよう。うん、反省した。

「だから、何でもそんなこと黙ってたのよ士郎！」

時計塔が震撼するくらいに声を張り上げる。慌てふためく目の前のバカは、しれっと答えた。

「落ち着け遠坂。これ、贋作だぞ。あの爺さんの本物と比べたら存在感も違うし……」

「贋作でも宝石でしょ！　っていうか！　あんたいつ大師父に宝石剣を見せて貰ったのよ！？」

世界中ならまだ見つかるかも知れないが、異世界中となれば会える機会などそうそうない。だが目の前のこの男、幸運値が低い割に問題ごとに対しては幸運値がAなんじゃないかと思う。

事実士郎は大師父に気にいられている。まあセイバーも気にいられているのだろうか。時計塔にたびたび顔を出しては士郎とついでに私に会って近況報告を聞いて去っていく。それが大師父のサイクルとなり、時計塔の他の魔術師は士郎についてなにやら疑いを持ちつつある。

魔法使いがわざわざ会いにくるほどだ。魔術は隠匿すべきものと士郎も分かっているが、下手に有効範囲を広げて取り入れられ、投影魔術を知られるのはまずいのだ。

事実確認をここ三日ほど受けていた。ロード・エルメロイ？世が庇ってくれなければ今もまだ時計塔の一室に監禁紛いなことを迫られていただろう。

セイバーにはそれなりに士郎を気にしてもらっているが、まさか

大師父が自ら宝石剣を見せびらかすなんて考えつかなかった。

「一週間ほど前か。設計図だけじゃ無理だって言ったら、本物を見せてやるって言われて」

「……………土郎の気にいられようをみていると私が惨めに感じるのはなぜかしら。」

「宝石剣は砕けば消えるし、本物より性能が低いからさ。使えないぞ。マナがあふれる場所じゃないと、ただの宝の持ち腐れだ」

「……………」

「それに、こんなの出回ったら俺は封印指定だろうが。あれのしつこさは知ってるだろう」

「……………」

「な？ これでも本物の7割も満たない張りぼてだぞ」

張りぼて。それが私の頭の中に残った。つまりアレか、目の前のバ力は、完成度70%ではお話にすらならないというのか？ あくまで真作に近づけなければ意味はないと仰るのか！？

これでも十分な研究は可能だ。少しズルいけれど、テスト用紙をカンニングするようなものだけれど。70%を解析して残りを遠坂の技術で埋めるという選択はこいつの中には無いのだろうか。

長年のつきあいになるが、もう何度土郎の不条理さに泣いたことか。

次第に、腹が立ってきた。

「う」

「う?」

「うがーーーーー!!」

「待て、落ち付けっで遠坂!」

「落ち着けるか! アレよ? 魔術師たちが夢見る根元への足がかりを、未完成とはいえたった八ヶ月、そうよ八ヶ月よ!? 私の20年余年をあっさり否定して、すつとぼけんの!」

「いや待て、話し合おう。な?」

「聞く耳持たず、ぶっちKILL!!」

私は感情の赴くままに士郎を殴る。殴る。殴る。

こいつはこの重要性を軽視し過ぎている。士郎の魔術は、はっきり言って魔法にもっとも近い大禁術。しかも贗作とはいえ、剣に限られるとはいえ、聖遺物や聖剣、魔剣の投影すら可能とし、その全てを弓のように投擲し行使できる固有結界『無限の剣製』を持っている。

魔術教会に見つかれば即アウト。脳髓のホルマリン漬けに直行する。

「魔法っていうのはね、もう5つしかないの。第一魔法は継承者がいないし！ 第二魔法は大師父、第三魔法はアインツベルン！ 第四魔法はそもそも、使い手の存在すらあやふやだし、第五魔法は破壊の権化、ミス・ブルーなのよ！？」

第一魔法は無の否定。無から有を生み出すことに念頭をおいたものの。

第二魔法は平行世界の運営。宝石剣・キシユア＝ゼルレツチにより確立されている。

第三魔法は魂の物質化。アインツベルンが聖杯戦争に用いた技術は第三魔法の一部分である。

第四魔法は情報に規制がある。噂ではアトラス院の誰かだが、巨人の穴蔵は情報に対しての規制は一般魔術師以上に厳密にする。故にどうあっても知られることはない。

第五魔法は時間旅行。青崎が成し遂げた魔法だが、詳細を私は知っていない。

第六魔法はエルトナムの死徒が作り上げようとして失敗したために存在はしない。

そうなれば現存する魔法はたった三つ。どれも奇跡の体現であり、常人には理解できないほどいつちゃってて技術なのだ。

それを、第二魔法の結晶をお手軽に作られては、モチベーションが一気に急下降だ。

衛宮士郎の魔術は、欠陥のある魔術だ。何せ、後継者がいない。いや、できない。

衛宮士郎の心象風景の具現が投影魔術の元であり、一代限りの奇跡の体現者というわけだ。

剣に限っては、士郎は奇跡の再現が可能だ。失われていった英霊の武具を再現する。奇跡の垂れ流し。格好の研究材料だ。たとえ贋作で8割しか再現できないとしても、8割は本物と同じなのだ。

封印指定を受け、今後の魔術の発展の為に殺される。それは分かっていた答えだ。ともすれば、素人が魔法を築くことを肯定などしたがるだろうか。

それに衛宮の姓も厄介になる。

目の前ののはほんとした顔にガンドでも打ち込もうかと本気で悩む。このアンポンタン、自分がどれほど危険か承知していないのだ。

まあ、それを承知していながら宝石剣の販売ルートを割り出していた私も私だが。

「とにかく、あんたの投影はね、魔法に近い奇跡の体現ってことは重々承知なさい！」

未だ納得がいかないような顔を向ける衛宮士郎。ああ、こいつ、何で自分が怒られているのか理解していない。

こういうところは相変わらず鈍感だった。もう聖杯戦争から5年ほどの付き合いになるというのに、未だに私の行動や桜の奮闘は軽

く流されてしまう。頭が痛い問題だ。

所々で殺意が沸くが、こういう奴なのだから仕方ない。

もうそこは諦めの境地。諦観。

「はあ………」

「ため息つくと幸せが逃げるぞ」

「バカね。ため息がつくから幸せが逃げるんじゃない、幸せじゃないからため息をつくのよ」

ことりと、宝石剣を机におく。光の関係で七つの光を放つダイヤモンド。贋作だと分かっている、この何割かは本物に限りなく近い。

ゴクリと喉が鳴る。

今の時勢、偽造宝石を適正価格で売ることは犯罪だ。しかし、魔術とはあらゆる犠牲『社会的信用』を払ってでもたどり着く境地。それを物欲的な生涯『要は金欠』で邪魔されるとあつてはそれこそ……。

エーデルフェルトに高値で売れば、それなりに資金になるのではないだろうか。

あそこなら転売などしない……。いやいや、不倶戴天の敵から金をかすめ取るだけに塩を送るとは如何に。こんなチート、大師夫に見つかったらそれこそ異世界案内ツアーじゃないだろうか。

「遠坂、目が\$の形になってるぞ」

「嘘！ ちょっと人聞きの悪いこと言わないでよ！」

一瞬だけ。そう、本当に一瞬だけ。考えが頭をよぎっただけだといふのに。

「全く。じゃあ、棄却するぞ。あんまりちらつかせていいものでもないしな……………」

いそいそと士郎は宝石剣を取り上げる。現存するサーヴァントにも等しい奇跡を簡単に消されてはおもしろくはない。なによ、あともうちょつとだけ見ても罰は当たらないはずなのに。

ふと、一度宝石剣を使ってみた衝動に駆られた。

遠坂は大師夫から設計図を託されている。つまりは作った暁には使用を認められている。魔法の運営。平行世界へと穴を開ける行為。魔術師としての喉がなるほどの魅力があった。

少しくらい。私の中の悪魔が甘い誘惑を提示してきた。

「ね、ねえ、あとちょつとだけ」

「……………いやな予感がするんだが」

その、いかにもおまえうつかりやらかしそうだなみたいな顔をするのはやめて欲しい。でも今からののは大丈夫。ちょっと次元に穴を開けてみるだけだから。

「少しだけだぞ」

士郎は疲れたようにため息をはいた。様々な角度から見回し、構造を脳裏に焼き付けていく。そして軽く。魔力をほんの少し込めて放った。手首のスナップを利かせてほんの少しだけ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

出来心だった。まさか本当に成功するなんて。

緑豊かな、異世界はそんな場所だった。森林伐採が盛んに行われている今となつてはこのような未開の土地など珍しい。さらには大きな城のような屋敷と夜空に浮かぶ双月。異世界で間違いない。

あれ、もしかして私、やつちやつた？

「遠坂！ どうするんだよコレ！ 尋常じゃないマナが溢れてるぞ！ まさか神代の世界にでも繋いだのか！？」

「ええっ！？ 私そんなのしてないわよ！ ちょっと軽く適当に繋いだけじゃない！」

「・・・・・・・・・・はっ！ 適当でもこの威力。つまりは私には秘められた力が・・・・・・・・。いや、宝石剣の完成度が高い所為ね。」

「・・・・・・・・・・ま、放っておきましょう。時計塔には魔力の暴発って伝えておくし。この部屋には士郎専用の耐魔力符が張り付けられてるからそうそう外に魔力が漏れることは無いでしょう」

「樂觀的なんだが、いや、それがベストだな。うん。俺たちはなにも見ていない」

「いい判断ね士郎。やっとあなたも魔術師らしくなってきたわ」

はっはっはと笑いあう。お互いに処理能力を超えた事態に頭が麻痺していたのかもしれない。

だが、それも、大きな屋敷から放たれた魔術の兆しによって遮られた。

「まず……もしかして気づかれた？」

しかし、見当違いもいいところに魔術は放たれる。笑い声が聞こえるし、もしかしたら魔術師が集まって仲良く腕の見せ合いでもしているのかしら。

平行世界だからこんな考えが沸くが、この世界ではあり得ない。巨人の穴蔵に代表されるが魔術師の研究成果は自己のみに開示を許されている。そのような他人に見せびらかす魔術などあってたまるか。

「なあ、遠坂。やっぱりあっちの世界は魔術系統が違っんだな。火の玉とか氷の針とか、なんか巨人を生成してるぞ」

「………士郎。もう一度お願い」

「だから、火の玉とか氷の針とか、巨人の生成をしたりしてる………」

「巨人？ それってどんな？」

「ゴーレムって奴か？ でも使われている魔力量は低いみたいだ。たぶん、俺の強化の魔術並の魔力量で動かしてる」

「……………異世界だもの。そういうこともあるわ」

「それと、なにやら物質変換の魔術もあるみたいだ。ただの土が青銅に変わってる」

「……………異世界だもの。ということはここの世界の魔術を納めれば、純度100%の金の量産も可能かしら？」

「多分できるな。変換後は魔力を消せばただの青銅のままだったし」

「……………何てデタラメ……………。いや、まてよ、ここの魔術を学べば……………」

お金に困ること何てないんじゃない？ ……………。

「行くわよ士郎！」

「待て待て！！ 異世界だぞ！？」

「いいから、どうせまた戻ってくればいいんだし！」

「だからって……………ん？ つ！！」

先ほどまで言い争っていた士郎の顔がこわばる。ある一点を凝視し続け、睨むかのように視線が送られている。魔術の塊の着地点に、

おおよそ許容できない光景が広がっていた。

誰かが倒れている。私でも魔力で補助した目でやっと見えるかどうか。それで人であるかは判断しづらいが、胸が上下に動いているような微かな動きを感じた。

「士郎」

言葉はいらなかったと思う。何せ、お互いの位置を確認をしたときには異世界に入っていたのだから。

一刻も早く。その思いが私たちを動かしている。未だに動いているということは助けられるかもしれないということだ。士郎が飛び出していけば、宝石剣を行使できない彼は異世界に取り残される。故に私も動かざるを得ない。

「くそ………」

悔しそうに士郎の顔がゆがんだ。また魔力の上昇を感じる。あの城からだ。ここと城、そして倒れている子を結べば綺麗な三角形が形成されている。

一キロ程の道のりが邪魔をする。届かない。距離が開きすぎていて間に合わない。士郎の方から魔力の迸りを感じるが、あの大きな氷塊をあの子に到達するまでに破壊するだけの威力と早さはない。

あまり平行世界へ干渉すべきではない。それは分かっている。しかし、それはあくまでどれほど干渉するかは個人の判断となる。何せ、これが知れ渡ると怖いのは平行世界へと足繁く通う大師父のみだ。

他の魔術師は、自分達の害悪足り得ないのなら放置する。

「士郎！ どいて！」

だから私は宝石剣の発動を決めた。

一線。真一文字に引かれた剣筋から七色の極光が飛ぶ。光もかくやと放たれたそれは、氷の固まりにぶつかると熱量と光量で乱反射を引き起こす。

内側から外に向けて大量の熱を放っているのだ。切られた端から溶けていき、プリズムのように乱反射を繰り返す。花火よりも美しい、空にダイヤモンドの彩りが辺りを照らす。

「す………すごい……………」

私が引き起こした事態だが、私が一番驚いている。

宝石剣という規格外が起こした惨事に少し引いた。取り扱いには注意しよう。うん。

光は大源の急速な消失により消えていった。少し自身の魔力を込めれば平行世界からの相違時間軸から大源を引っ張りだして発動を可能とできるが、今の一撃で城は騒然とし、氷は溶けている。近づいても大丈夫と判断した。

駆け寄るとそれは女の子だった。

「大丈夫……………かしら……………」

それは命が持つかどうか。それ程までに与えられた傷は深いものだ。

冷静に対処できるのは聖杯戦争の経験故だろう。死体の前では多少躊躇するが、虫の息の相手に判断ミスや恐怖を抱くのは最悪だ。

ここ数年無茶に無茶を重ねる士郎のおかげで治癒魔術にもそれなりに明るくなってきた。

だがここ一番でうつかりをする癖は直らない。むしろ呪いだから解呪しなくてはいけないのかもしれないが。

身なりはいいのか悪いのか分からないが、純白のワンピースを着ている。が、服は擦り切れ、所々に血が滲んでいる。苦しそうにあえぐ姿は胸に不安を与えてくる。

それよりも、彼女の身長にびっくりした。

士郎が警戒してくれている分、彼女をよく見ることができる。身長からすると2歳、少し成長の遅い3歳児。肉が挟まれ、どうやって逃げたのかも分からないほど。

「・・・・・・・・っ！」

宝石魔術で治療にかかりたいが、今は集中できる場所でもない。ここはいったん身を隠してから元の世界に戻る必要がある。

「遠坂。早く治療してやれ」

怒気を纏った士郎が城を睨む。投影魔術で聖蓋布と黒塗りのハンターボウを取り出す。鷹の目はここからでは見えないあの城の人々に向けて殺気を飛ばしているのだろっ。

「はいはい、全く。ようやく大師父の宿題が進歩したかと思えば修羅場なんて。どうせ士郎の幸運値が低いせいだわ」

「う………関係ないだろ」

だから私は未熟にも冷静さを失った士郎を宥める役目になった。アーチャーの遺言通り、何とか目を光らせて士郎を改善させている。だが根幹にある「正義の味方」に憧れ、ならなければいけないという脅迫概念を変えることは不可能だった。

今は大切な物を守る、10を助けて1を犠牲にするようなやり方は形を潜めているが、場合によっては実行する。

疫病の少女がいて感染率が高く、解毒の可能性がないと分かれれば母親の手から少女を奪い、殺すことも厭わない。士郎は大切な物を守るようにはなった。だが助けたいと思う人の中に大切な人がいなければ、彼は大勢の人を救うために動く。

相手がたとえ10にも満たない子供であろうとも。足も動かない老人であろうとも。

後で後悔することになっても歩みは止めない。

徐々に壊れていく機械のように、人々の恨みや呪いを受けたとしても歩みだけは止めなかった。

「こんな小さな子を、くそ」

士郎の目の前には大勢の人が少女に向かって魔術を使った事実がある。

大勢は明確に悪であり、中傷じみた声や、笑い声からも少女を無抵抗なまでに殺そうとしたろくでもない奴らの顔が浮かんでくる。

しかし、少女は士郎の大切な人ではない。

そしてここにはどうしても殺さなければならない人はいないのだ。

「士郎。落ち着きなさい。それでも、私だって腹が立つてるのよ」

士郎は争いを好まないだろう。だが、私はこんなにこの子を痛めつけた相手に一太刀浴びせないと気が済まない。猫かぶった顔の下では未だに感情のコントロールとは裏腹に精神は未熟なままなのだ。

「……………分かった」

「なら、盾となって。私はこの子を看なくちゃいけない」

「適材適所だな。よし。俺は二人を傷つけさせやしない。何人たりとも、絶対に攻撃させない」

士郎の頭が少しでも冷静になったところで、私は傷だらけの少女によつやと向かい合うことができた。

血の消費が激しい。ほぼ半死半生に近い。瀕死状態でとてもじゃないが動くことも難しいし、動かせば体力を消費して事切れるかも

しない。

はつきり言つてまずい。既存の宝石魔術で治癒に向いた物はあるが、いかんせん士郎用にとつていた物なので全力解放で治してしまうとそれがスイッチになつてしまう可能性もあるし、魔力酔いになる可能性もある。

特にこのことが原因で眠っている魔術回路が起動するのは、この子の人生を変えてしまふかもしれない。

「……………内部の損壊が激しいわね」

だが、今は緊急事態だ。そんな悠長なこと言っている暇もない。

即決と直感が頼りなのだ。サファイアを取り出し、魔力を流す。胸の部分、なにやら臭気を放つ物を剥ぎ、胸を晒す。肌に直接あてて治療を行う。必要最低限しかできないために、骨の修復は不可能でも止血と生命維持に用いればいい。

後は病院の仕事と丸投げしたいのだが、何かいやな予感がする。

そもそも、このような未発達な土地の未発達な場所で病院などあるのだろうか。

道路の整備もされていないような昔。まるで教科書で習う中世のような景色。感動よりも先に焦りがでた。

ここでは十分な治療はできない。つまりは元の世界に帰らなければいけないわけだが、座標軸もなにもなしにどうやって適当につなげばいいのだろうか。

次元を開けた場所は遠すぎるが、そこから逆算して次元を越える方が安全だ。この世界の魔術に興味が尽きないが、いたしかたない。

あらかた治療を終え、決心する。

この子を私たちの世界につれていく。放っておくのも無責任だし、関わってしまった者の責任という奴だ。

心の贅肉だとは分かっているがなかなか割り切れない。

………なにこれ。辺りの大源が急速に集まりだした？

「………って、この子、まずいわよ！ 士郎！ 早く終わらせないとこの子、死んじゃうわ！ この子を今すぐ抱えて戦線離脱！！」

目の前の少女を中心に大源が溢れだしている。あり得ない。世界の魔力を個人レベルで使うには魔術回路を通して生成しなければならない。

例外としてセイバーのように魔力炉心があれば自力で魔力を生成できるが、これはそんなレベルじゃない。

明らかに魔力を吸い上げて、体を通して垂れ流しにしている。空間を埋め尽くす大量の大源。先ほど宝石剣で放ったものと大差ないほどの濃密なもの。

なんてデタラメ！？

でもこの子自身に魔力の制御ができていない。逆に異物が入っているかのように体は拒絶を示している。このままでは魔力暴走を引き起こす。

「一端、引くわ。元の世界でしか無理ね。ここは大源が多すぎる」

確かめるように呟いた。まずは辺りの大源をどこかにやらなければいけない。

「ち・・・・・・・・つ、分かった。遠坂、最後にでかいの、かましてやれ！」

士郎の言葉に頷く。どうせ大源を使わなければいけないのだ。殺人はしないつもりだが、城を破損するくらいならこの子を痛めつけた対価と釣りあうでしょう。

「OK！ いくわよー！！」

宝石剣を構え、七色の極光を放った。辺りの大源を一気に消費する。少女の呼吸は安らかなものとなるが、一寸後にはまた大源が少なからず集まってくる。

士郎に少女を抱えさせて足を強化する。士郎は私と少女を気遣いながら走り、元の場所へと急ぐ。私も息を切らしながら到達した。

「遠坂、早く！」

「分か・・・・・・・・って、い、いるわ、よ！ 息ぐらい整えさせて・・・・・・・・」

体力バカめ。心の中で毒づく。

さっさと息を整えると宝石剣を構える。わずかに時空が歪んだ後は残っていた。そこにあわせるように宝石剣を突き刺し、次元の扉を私たちの部屋に繋げる。

「よし！ 安定したわ！」

我ながら完璧な出来だった。無理矢理開けたただけだが、ちゃんと元の私たちがいた世界だとわかる。何せ先ほどは切れかかっていたセイバーとのレイラインが繋がったからだ。

「いくわよ」

そして元の世界に帰ってきた。士郎は背中に少女を担ぎ、荒い息を繰り返す彼女をベッドに横たえさせる。

「・・・・・・・・・・はぁ」

思わずため息をつく。これから起こるかもしれないセイバーの言及やこの子の説明。そして大源を直接取り込めることが可能な少女だということを時計塔にいかに隠すか。

「ため息をつくと幸せが逃げるぞ」

皮肉だろうか。数時間前と同じ言葉を士郎は言う。

「バカね。ため息がつくから幸せが逃げるんじゃないって、幸せじゃないからため息をつくのよ」

だから、私は少し疲れた声で同じ答えを示した。

運命邂逅 1（後書き）

士郎、凜の登場。

例に漏れず、原因は遠坂さんのうっかりです。

運命邂逅 2（前書き）

いきなり独自設定を導入します。

修正

青崎 蒼崎

運命邂逅 2

緩やかに景色は停滞していた。

時間が遅いのだろうか、自分の動きがゆっくりで心臓の音さえ平常時よりやや遅い。

そこには誰もいなかった。ただそこに在るだけの空間。

優しい光に包まれた、ぬるい空気を纏う。

嫌ではない。

むしろ心地いいと感じてしまうほど。

歩いてみるがやはり何もない。

少しだけ頭に『死後の世界』という考えがよぎるが、それはない。

こうして心臓は動いているのだから。

だから、これは夢なのだ。

そう結論付いてしまったからは周りの景色をやつと直視できた。

私の所以外には当たっていなかった光が辺りを照らす。

水と光の王宮。

王宮からは水が流れ、その世界は水浸しだった。

太陽は水に反射し、青い空は雲すらない快晴。

水は透き通り、光を反射している。

きらきらと水の中は宝石のように光り出す。

綺麗だなと思ったのは一瞬だった。

すぐに私が立っている場所が水しかないことに思いつく。

急激に戻る重力に引かれ、私は水に落ちた。

柔らかい水はまるで無重力のように私を包み込む。

息ができない。

口を、喉を通して入ってくる水は温かった。

その水に包まれている私は、なぜだか幸福感に包まれる。

水が血と混ざりあう感覚。

眠気に誘われるままに瞼は閉じられた。

R u t e 1 - 1

夢から覚める。

目の前に写ったのは石造りのどこかの部屋だった。ここがどこだ
と思う前に、助かったと安堵する。

部屋には見たことのない物がいっぱいあった。緑色の液体が入っ
た透明感のあるガラス。

それは5本立てかけられていて、紫、黒、黄、青と、見るから
に危なそうな物だった。

触らないに越したことはない。

ベッドのそばには誰かいた。腕を枕に布団に顔を埋めている。

助けてくれたあの黒髪の女の人か赤銅の髪の人だろうか、と思
ったが、一目で違うと分かった。

少しの落胆に見舞われるが、目の前の金髪の・・・・・・・・体つき
からは女の子。

14歳ほど年上の、だらしなく寝言をいいながら睡眠を取る彼女
を起こしていいものかためらう。

「・・・・・・・・ふふ、士郎。このように料理を作っていただけで恐
縮なのですが・・・・・・・・」

幸せそうな顔で眠る彼女を、今起せば大惨事に繋がりにかけない
と在るはずのない直感が告げる。

「・・・・・・・・いいでしょう。私の舌を満足させるには祖国の味は

不味すぎる」

切実な声が聞こえた気がした。

「……………私の箸に、着いてくれますか？ いいでしょう。我が全霊を以て挑みます……………」

本当に寝言だろうか。一方的な最後通牒を残し、彼女はまた深く睡眠の世界へと入っていく。

「……………痛……………」

不意に、腕に痛みを感じた。

ゴーレムの投石が当たった方の腕だ。

何かで固定されていて自由に動かせない。

包帯を巻かれていることから誰かが治療してくれたのだろうか、その誰かはここにはいない。

年のせいかな、筋肉は未発達。

あの逃走劇で見事に筋肉痛を起こしていた。やはり3歳児にそのようなオーバースペックを求める方がおかしいのだろう。

筋肉が断線してなくてほっとした。しばらく動かない方が賢明というもの。

一度起きあがってみたものの、またベッドに背中を預けた。

近くに在った水差しから水を喉に流し込む。

幾分か気分が落ち着いてきた。

なにやら、安全だと分かったのかまた眠気が襲ってくる。

瞼を重く引つ張るそれに負け、いつの間にか意識は睡眠慾に埋もれていく。

今度は、いい夢が見れますように。

ただ今の幸福だけをかみしめ、眠りについた。

S I D E ゼルレツチ

遠坂の末裔が、やはり衛宮の倅の投影魔術で魔法に一歩足がかった。

ようやく考えが追いついたようで安心する。

あの家系は重要なことを見逃す傾向がある。

衛宮の倅の魔術は掛け値なしに強力なものだ。

それこそ、やはり大禁術に手を伸ばすほどに。

そして戦闘技能も磨けば光る。

蒼崎や真祖の姫には及ばないだろうが、やはり老婆心でも働いて

いるのか、なにかと気にかかってしまうのも事実。

そして昨日。

別の世界で在ったがどこかに次元の歪みを感じた。

遠坂だろうか・・・と次元が開いた世界に次元を繋げると、
ちよūdおもしろい者を担いで遠坂は帰ってきた。

「・・・・・・・・・・はえ！？　だ、あ、大師父！？」

素っ頓狂な声を上げる遠坂。

うむ、やはり小奴はからかいがいのある小娘だ。

そして士郎に目を向ける。

投影魔術の使い手。

正義の味方を目指す愚か者。

それでも無骨ながら理想を目指す姿は美しい。

儂などが介入するまでもなく、奴は自分の曲げることなどしない
だろう。

その背中、儂は歓喜に震えた。

半死半生の少女は、そこにいるだけで他の魔術師にはない存在感があつた。

間違いない。

全く、小奴らの周りには異常なことしか起こらないのではないだろうか。

だが観察している分はおもしろければおもしろいほどいい。

「遠坂、衛宮よ。その少女、どうした？」

「え……あ、えと、大師父の宝石剣で別世界で攻撃を受けていたところを保護しました……」

なにやら歯切れが悪い物言いだ、別になにかやらかした訳ではない。

それよりももう一度その少女を観察する。

微弱な小源と膨大な大源を纏うそれは、やはり伝承にしか存在し得ない者だった。

「ほう、竜人か。生きている姿を見るのは初めてかの」

竜人。

世界との契約を交わしたわけではないのに霊脈、竜脈から大源を吸収できる者を指す。

アインツベルンが世界に出る前は、聖杯戦争は彼らによって成り立っていた。

在る者は御子。

在る者は魔術師の息子。

在る者は人外の異形。

先天的なものでしかなく、生まれ持ったの才能でしかない。

すぐに世間とは隔離され、魔術師によって研究の対象となり老衰を迎えることができた竜人は一人もいない。

強力な魔力タンク。

それは魔術師にとって喉から手が出るほど欲しいものだ。

故に聖杯の入れ物として非人道的な処置を施された後は聖杯の器とされていた。

竜人とは端的に言えば魔力を汲み上げる貯水タンク。

個人で使うことさえ難しい魔力を自身の小源で無理矢理制御する。

故に自身が竜人であると気がつかなければ魔術はおろか、魔力も感じ取れない。

汲み上げる魔力が濃厚かつ膨大なため、魔術師の家系に生まれたとしても落ちこぼれ扱いを受けるだろう。

親ですら自身の子供が竜人であれば魔力を感知できないのだから。

「クラスでいうと、キャスターか。なるほどなるほど、やはり愉快だ。おもしろい」

「あの、大師父？」

「どうしたんだ、爺さん」

二人はこちらを気遣うように声をかけるが、今はそれよりも竜人に意識が向いている。

虫の息、そして僅かばかりの応急処置しか施されていないそれは、やはり子供故に、そして傷が深いために、竜脈から溢れ出る大源を吸収しては吐き出すサイクルを繰り返す。

息をするのも厳しいのか。

その苦しみから逃れさす為に頭に魔力を送る。

脳の中の神経を魔力で無理矢理統制させるためだ。

「……………はぁ……………グ……………う……………ふ……………」

やはり予感は的中した。

小娘の中を暴れ狂っていた魔力は儼の魔力によって押さえつけられ、徐々に鎮静化していく。

それにしても、やはりおもしろい。

衛宮の小倅と同じ。

いや、それ以上のモノを内側に内包するか。

楽しみはつきぬ。

「……さて。遠坂よ、今回のことは大儀であった。まさか竜人をみる日がこようとはな。小娘のことで困ったことがあれば、いつでも僕は力になるうぞ」

「ありがとうございます。大師父」

「うむ。ではな」

次元に門を開ける。

その先はただ深い闇に包まれているだけだ。

躊躇もなく僕はその中に入った。

いつか顕現するであろう竜人の末裔。

未来に大成するであろうその姿に口が歪むのを感じながら。

運命邂逅 2（後書き）

ゼル爺登場。そしてセイバーの切実な寝言はイギリスに喧嘩売ってる訳じゃありません。断じて。そう、だんじ（ry

運命邂逅 3 (前書き)

時間跳躍！ そしてまたもや独自設定！

運命邂逅 3

私、セリム＝アルハインツは魔術師だ。

ようやく五歳になり、義父と義母からは魔術を、セイバーからは剣術を学んでいる。

たまに次元を切り裂いて登場する義曾祖父？ は、良くも悪くも私に影響を与えてくれる人となった。

「義父、少しよろしいですか？」

「うお？ どうした、セリム。投影魔術は諦めたんじゃないのか？」

意地の悪い質問だ。

絶対に義母の影響を受けているではないか。

そんなことは微塵も感じていない義父は純朴そうな顔をこちらに向けて、手の動きを止めた。

ちなみに今は鑑定職に就いていて真贋を見極める仕事に就いている。

しかし、残念ながらその給与のほとんどは義母と私の宝石魔術の材料に当てられる。

「投影の基本は学びましたが、やはり義母の言うとおり合いません。

なのでこの前お会いした人に教わった方法を試してみるつもりです」

とたんに義父は微妙な顔をする。

まあ、自分がいつか敵対するかもしれない相手からの技術を義理とはいえ娘が用いるのに抵抗を感じているのかもしれない。

義父は今、教会から不信の目で見られている。

故に教会サイドは事実確認のために戦闘員とも言える代行者を送り、数日監視を行っている真つ最中だ。

今は士郎特性カレーで足止めしているが、セイバーとシエルという大食いにかかればそれほど時間をかけずともなくなってしまうだろう。

その代行者はシエルという聖典持ちの蒼いカソックを着た女性だ。

セイバーとの稽古中、魔術鍛錬中、監視の名目で義父に着いていたため、自然と私が目に入ったそうだ。

投影魔術という無駄な技術を学ぶ私。

筋力が未発達なのに剣術に傾倒する私。

そしてゼル爺達しか知らない私の秘密。

私は竜人だ。

世界との契約なしに世界の魔力を行使する異端だ。

故に、世界と私は対等であり、ゼル爺には予言めいたことも言われている。

いつか私はこの身に固有結界を宿す。

私という世界の中身が顕現する。

シエルにバレたのは私が竜人だと言うこと。

情報ソースはわからないが。

だが今はまだ発現していない。

シエルは何もみなかったことにするらしい。

頭の固い教会の中では比較的珍しい人柄のようだ。

もしかしたら士郎がカレーで釣ったのかもしれないが。

「うん。シエルさんが言ってた黒鍵。その投擲術と式典各種を学ぼうかと・・・・・・・・」

私は義父のような投影は不可能だ。

せいぜい数三十数秒展開できるかどうかの微妙な魔術。

そしてそのような無茶な投影を実体として結ぶという点では義父は本当に人間だろうかと疑ってしまうほど規格外だ。

かつては宝具すらも投影できていたらしい。今は緊急事態でなければ投影しないが。

だが、私ではそこまで投影魔術を極めることは不可能だ。

なので使い捨てできるモノに焦点を絞った結果がこれだった。

投影した黒鍵での式典付与。投擲するものとしては適任のものだ。

義父のようにみただけで解析できるというものでもないが、馴染めば早いだろう。

「まあ、いいんじゃないか？」

二つ返事で納得する義父。

実用性は納得できる物だったのか、案外簡単に決まってほっと息を吐く。

反対されたときのことを考えていたので、これでスムーズにいくかもしれない。

「ただし、遠坂への説得は自分でするんだぞ」

……、義父は中ボスであった。ここから義母というラスボスを説得するには骨が折れそうだ。

「・・・・・・・・・・はあ、私にですか？」

困ったような顔を浮かべるシエル。

母と思わぬ伏兵、セイバーによって反対されたが、何とか勝利を勝ち取ることができた。

特にセイバーは『自分から学んだ剣術に自信が持てないとも言うつもりか？』と冷ややかな怒りを発していたので今夜の鍛錬が恐ろしくて仕方ない。

「ねえ、シエル、教えて？」

「・・・・・・・・・・まあ、聖堂教会の魔術とは認められていない代行者特有の異端の技術なので教えるとなっても別に問題はないとは思いますが・・・・・・・・・・」

ちらとこちらを見る。主に筋肉。そして首を横に振る。

「残念ながら、投擲する黒鍵はあなたのような幼子が扱えるほど軽くはありません。故に断らせて・・・・・・・・・・」

「大丈夫ですよ。ようは筋肉さえ足りてればいいわけですから」

「ごそごそとゼル爺からもらった甘くないあめ玉（のような形状のモノ）を取り出す。」

それを訝しそうにシエルは見てくるが、説明もなくいきなり私はそれを飲み込む。

どうせセイバーとの鍛錬もあるし、本当の体よりはある程度成長した体で反射等を鍛えた方が有意義だということで、筋肉が付かない割に技術だけを学べるということを可能にした魔法薬だ。

名前は……年齢詐称薬？

ゼル爺が異世界で買ってきたモノの中では比較的マシな部類に入る。

効果は一定時間、はつきりと示すなら満月が輝く日にはリセットされる。

中にはウンディーネの涙という超ド級の魔術媒体が使われていて、この世界での魔術師に売るとなれば原価だけで8桁を越えるという代物。

義母には伝えるなというお達しは重々承知している。

飲むと体は実年齢から10歳プラスしてまで成長し、目線も高くなり、周りの人たちにも私が大きくなったように見えるが、結構効果は単純である。

認識の誤差を利用するのだ。

個人を認めるには他人と自分という二通りの観測者が存在する。

故にその両方が観測した結果が『成長した自分』だというなら世界はそれを了承しなければいけない。

一種の暗示を越えた世界規模でのことだ。

異世界では常用こそされていないものの、市販として出回っている。

なお、これと同じモノを用意するのには第一魔法か第五魔法を極めるしかない。

特に第五魔法を扱えるようになれば、これと同じようなことは一応可能である。

ただ、第五魔法の方法は未来と過去の自分を無理矢理に呼び出すという乱暴な方法ではあるが。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・私はなにも見ていません」

「賢明な判断、ありがとうございます」

説明したのはこのためだ。

私からこれを押収しても大師父が定期的に補充にくるし、教会でも義父母と爺さんが私をかわいがっていることはリークしているはず。

虎の威を借る狐で申し訳ないが、利用できるモノは利用するのが私の流儀だ。

だってそうしなければ、いつか私は死んでしまつかもしれないのだ。

私はおぼろげな記憶の中でハルケギニアでの家を覚えている。

恐怖からくる焦りと、強くなれない搔痒がない交ぜとなっている。

私は本来、ハルケギニアでの住人であってここにいるべきではない。

つまり、世界の修正が私に働きかける前に、私はハルケギニアに帰らなければいけない。

あそこは中世のヨーロッパの技術力と、傾倒しすぎた魔法文化しかない。それは、メイジであっても貴族ではない私には辛すぎる。

ハルケギニア式の魔法は使えない。

私にはそれを使う才能がなかった。

あちらの魔法を見よう見まねで行っても、魔力は爆発しか起こさない。義父には驚かれたが、工房がめちゃくちゃになるため使用は控えている。

だから、一つでも多く、生き残る為の手段が欲しい。

「まあ、仕方ないでしょう。教会側としては、貴方たちにキシユ・ゼルレッチの背後関係が明らかになったとでも伝えておけば、どうせ鵜呑みにするでしょうし」

一部問題発言も出たが私は無視する。ギブアンドテイクって奴だ。

「では鉄甲作用から。修得具合を見ながら火葬、土葬、風葬、水葬式典へと教えていきます。何か質問は？」

「シエルの魔術特性はどれに当たるの？」

「私ですか？ まあ、いろいろあつて雷や火に特性が強いですが、本来であれば空です」

「空？ 空葬式典なんてあるの？」

「ありませんよ。鳥葬ならありますが。それに、空は本来であれば何かを『カラ』にする事に特化した属性です。自分をカラにすることで戦闘機械として成立することも可能ですし」

シエルというのはフランス語で確か『空』を意味する言葉であるし、彼女の本来の名は別物でシエルというのは洗礼名であるらしい。

弓を関する埋葬機関第七位。

その魔術というのは持って生まれた物なのだろうか、それとも、教会が彼女に付与した物なのかはわからない。

「ま、こんな使えない魔術いりませんけどね。実践で役に立ちませんし、制御に失敗すると、私自身が悲惨なことになります」

極めて明るく、彼女はそういった。

「さて、ではとつとやりますか」

「ええ、では。何度か実演してください。それだけで十分ですので」

訝しそつにしながらもシエルは魔術行使を始めた。

その一挙一動を、私はそばでじっくりと観察させてもらった。

運命邂逅 3（後書き）

先輩登場。

年齢詐称薬はネギまのあれです。

運命邂逅 4（前書き）

主人公のチート魔術登場。

おそらく在り来たりです。

運命邂逅 4

シエルは教会から派遣されているのには二通りの密命がある。

一つは聖杯戦争で召還されたセイバーの調査。

反英雄であった場合は教会は代行者により滅却するつもりだったが、その懸念はもうない。

なぜならシエルが来た直後に聖剣を振り回しながら義父と私を追いかけて回すセイバーを見てしまったらしい。

黄金色に輝くそれから、紆余曲折ありセイバーの真名がアーサー王だと知れてしまった。

因みになぜ私と義父が追われていたかという点、セイバーに内緒でスイーツを食べていた。

クレープが売っていたのだが、アイスを入れるタイプで持ち帰ることができないと判断。

そのまま二人分だけ買って食べながら戻ったのだが、ちょうど外に出ていたセイバーとばったり。

クレープ。義父。私。そして自分の方を指さしたのだが、義父は首を横に振る。

首根っこを捕まれてそのまま道場でボコボコにされた。

このような犠牲の上にシエルが情報を得てしまったのだ。

後でセイバーにクレープを4つほど買った義父の土下座に、4つ目のクレープを食べながら仕方ないとばかりに許したのだ。

そしてもう一つは大師父の監視らしい。

そして大師父が何かと面倒を見ているらしい4人組、遠坂、衛宮、セイバー、そして私の調査もかねている。

聞けば大師父は死徒らしい。

だが命を長引かせる以外には吸血もしない、人もおそわない（おもしろい人物には例え真祖の姫君であつても手を出す）が、教会としては居ること自体が罪とのことで肅正に赴いていると言うところだが、シエルにその気がないため報告のみの保留となっている。

平行世界に逃げられれば教会側は手出しができないため、慎重にならざるを得ないと。

シエルは義父のカレーが大好きだ。

だからカレーを作つてあげれば大抵のことは聞いてくれる。

だからこそカレーを盾にして技術を学ぼうとした結果。

投擲を行ったシエルと同じ軌道を描き、対象物を貫く私の姿を見てシエルが床に倒れて泣いている。

それを同情でもしようものかと悩んでいる義父を後目に、セイバーもやはり少しあきれている。

私の魔術特性は異端も異端。

ただ自身の目で見た事柄を模倣し、『再現』することにだけ特化した。

だから義父の投影魔術も模倣できるはずだが固有結界から引つ張り出すということが私には再現できない。

故に39秒だけ展開できる使い捨ての武器を創る魔術としか使えないのだけれど。

義母からは宝石魔術と流動魔術を教えてもらい、セイバーからは剣術を見せてもらっている。

真剣での実践を行ったことはないが、前のクレープ動乱（私命名）により何度かセイバーの攻撃（魔力放出あり）を防いだことから目を付けられている。

いつか、木刀から真剣に切り替わるのだろう。

そして今は、シエルの投擲技術と鉄板作用にかかる癖を模倣し、かみ砕き、反芻し、再現する。

それが私に許された魔術。

最適化した私の黒鍵は見事鉄製の厚い板をくり貫いた。

続いて火葬、風葬と行い、修得する。

土葬と水葬はシエル自体が苦手としているため、それほど威力は出なかった。

「……………私の努力が……………」

とかつぶやいているが、極力無視。

だってこれでセイバー、義父、義母に続いて四人目だもの。

さすがにゼル爺はむり。

私の再現魔術は一定期間以上行動を共にした相手、もしくは相手の技術を何回か観察することで再現を可能にする。

技術、魔術を模倣する。

しかし、ランクは下がるし完璧に模倣できない。それこそ自身よりも強いものにあれば模倣するまでもなく殺されてしまう。

初見殺しの義父とは違い、こっちは手札を事前にそろえなければいけない。

しかも練度も低くそうそう使えない。

ジョーカーも持っていない。

そんな私が慢心できる暇などないのだ。

あのハルケギニアの恐怖はそれほど根太く、私のトラウマとなっている。

手札を有効に切り、自分のペースを作っては要所要所でジョーカー
― 足りえるものを切る。

私の戦いには強い手札が必要不可欠だ。

習ったものの練度を上げるが、これもまた難しい。

本来の担い手、使い手でないため、基礎がなっていない。

結果だけを追い求めているので過程がわからない。

公式を学んでいないのに答えだけ出る数学のようなもので、応用
が利かないしそれ以上の効果を生み出すのは難しい。

結局は0に戻り、反芻しながら結果を強化していくしかない。

理解し、模倣し、再現していく。

ただその繰り返しを延々行い続けていく。

根源などに興味はないが、それが強くなるための、ジョーカーを
上回る切り札だとしたら欲しい程度には考えているが。

そういう意味では私は魔術師ではなく魔術使いだ。

「シエル、あまり考えない方がいい」

「セイバーさん」

「セリムの魔術は、反則級だ。私の（魔力放出ありの出力の）剣戟すら真似しているのだ。魔力ブーストを保ったまま、相手に斬りかかるとなれば私でも対処が難しい。もっとも本人の経験が浅すぎるため、食らうようなヘマはしませんが……」

義父は青い顔をしている。

「そのような『結果だけ』を再現する相手に条理など通用しません」
断言されるとそれはそれで悲しい。

うんうんと頷く義父を義母直伝のガンドで打ち抜きたい。

「シロウ、セリムが聖杯戦争に参加してなくてよかったですね。もしセリムが何らかのサーヴァントを使役していれば、もしそれがキャスターであつたなら、神代の奇跡を扱う魔術師の誕生でした」

なんだかそれは惜しいような、そんな気がする。

でもそのキャスターというサーヴァントに女性的な危機を感じるのはなぜだろう。

こう、着せかえさせられるような、玩具にされるような気がしてならない。

忘れよう。

これはあつたかも知れないＥＦの話だ。たらればの話なんだ。

「もういいです。確かに異端かも知れませんが、教会はセリムさんのことを詳しく調べるとは言っていないませんし。私が深く追求することはありません」

疲れたように呟くとシエルは居住まいを正した。

「本調査はあなた方と宝石翁との関係、及び使役するサーヴァントの確認です。両方が成し得たということは私がここにいる意味はない。よってこれにて失礼します」

カソックをただし、その中に黒鍵をしまつとシエルはそんなことを言い出した。

確かに気がつけばたった4日だったが、監視のためかいつも側にいたから時間感覚が働いていなかったのかも知れない。

別れてしまふのが惜しいと思ってしまうのはダメなのだろうか。

義父はそつと頭を撫でる。

優しい笑みでこちらの心情を察しているのか何も言わなかった。

「あ、そうそう。何もこれが今生の別れというわけではありませんよ」

……。シエルは唐突に振り返ってそういった。

教会の代行者はあまり私用で出歩かないのでは？ とも思ったが、仕事さえやっていればどこに寄ろうとお咎めなしらしい。

事実、ほかの代行者も無断で勝手にどこかにいつている者も少なからずいる。

「土郎君のカレーの味は、まさにメシアンのカレーにも匹敵するほど。私の舌は一番のカレーを所望しています。なので、頻繁にカレーを食べにきますので、そこはご了承ください」

では！ と元気よくシエルは去っていった。その場に残された私たちは、しばらくポカンとしていた。

「……あ、そうだ。年齢詐称薬『幼』を飲まないと」

そろそろ時計塔から義母が定期報告に来る。

今日は研究成果の発表とので気合いが入っていたが、どうなったのだろうか。

宝石魔術の家系は多く存在する。

その大本の師となるのがゼル爺だ。

たいそうな爺さんだと思っていたが、その実立派な爺さんだった。

その第二魔法を継得が家系に与えられた課題であり、時計塔でもその論文を発表しようものなら評価は高くなるだろう。

だが、あの義母のことだ。

いつものように大事な場面で空回りしてすっかりするのだろう。

「さて、義父よ。そろそろ準備をしよう」

「ああ。セイバー。大事なものとかがあるか？ 旅行鞆に詰めるぞ」

「ええ。大丈夫です。それにしても、今度はいつたいどこにいくのでしょうか」

なぜ私たちがこのような未来予知を可能としているかはご想像にお任せするが、あえていうならこのようなことは過去に4件有ったということだけは伝えておく。

エーデルフェルトがしゃしゃり出てとか、あの教授頭が固すぎるとか、論文をそのまま忘れて出かけていたりだとか。

義母はすぐさまアパートに来た。怒り心頭といった、怒気を上回って逆に冷静となった無表情で部屋を見渡す。

「明日、日本に里帰り」

それだけ伝えると時計塔の自室に戻った。

セイバーの直感がついていくと危ないというので義父と私は赤い悪魔の癩癩につきあうことはできないと、その日はアパートのソファで寝た。

セイバーが布団代わりに暖めてくれたので多少は寒くなかったが、義父が慣れないセイバーの添い寝にノックアウト寸前であった。

翌日。

怒りが多少収まった義母が私たちの様子を見て義父にガンドを食らわせた。

さすがに私も可哀想になったが、言えばこちらまで飛び火するかもしれないので黙った。

運命邂逅 4（後書き）

再現するだけの魔術。

運命邂逅 5（前書き）

結構設定を考えるのは面白いです。

運命邂逅 5

空港から電車で数時間。

黙っていても注目を集めるセイバーと義母。

男たちの嫉妬を一身に浴びている義父に同情する。

ちなみに私は義父の膝の上でお菓子を食べている。

別に義母の隣が怖かったとか触らぬ神に祟り無しだとか思っていない。

ひしひしと緊張が伝わってくるのだ。

義母は妹と仲がいいが軋轢があるという矛盾した説明を受けている。

本来は姉妹なのに性格の不一致やら妹の黒化やら義母のシンデレやらでまともな会話につながらないらしい。

義母の妹は桜というらしい。

会ったことはないが、何度か聞いたことがある名前だ。

桜は姉に羨望と同時に嫉妬を抱き、義母は妹に罪悪感と義務が緋い交ぜになった状態。

それでも義父が緩衝材となっている模様。

時たま義父が起爆材足り得ることも少なくはないが。

セイバーの考察はこんなところだ。

「さあ、ついたぞ」

武家屋敷というのだろうか。

事実、日本でも珍しい暖かみがある木造住宅であった。

衛宮の表札には未だに切嗣と士郎という名前が残っている。

切嗣とは士郎の父親代わりだったらしい。

それを感傷深く撫でた後、玄関のチャイムを鳴らす。

パタパタとスリッパの擦れる音とともに、誰かが玄関に駆け寄ってきた。

「どちらさまでしょうか？」

そういつて現れたのは、紫色の髪とセイバーと私と義母の胸を足したような爆乳娘がそこにいた。

思わずうなる。

あれはいったいどんな原理でたわわに実ったのか。

身体的特徴を再現できる魔術ではないのが悔やまれる。

「……………先輩？」

「や、桜。数年ぶりか？」

「先輩！！」

まるで待ちこがれた恋人の再会のシーンみたいだ。

といつても、女性陣はおもしろくない。

義母はもちろん、セイバーですらちょっとイラツときている。

目に入っていないのか、それともただ単にいない者としているのか。

まあ数年ぶりの再会なのでそこまで目くじらを立てなくてもいいのではないだろうか。

「桜、お客さんですか？」

奥から、これまたナイスバディな紫色の髪をした女性がでてきた。

眼鏡とGパン。

黒いTシャツと、ずいぶんラフな格好をしている。

「ライダーか。久しいな」

「セイバーですか。それに凜と士郎も。お久しぶりです」

桜の痴態が目に入っていないのか、ライダーは全く動じずに礼をする。

そして私の気配を感じたのか、目線を下げてきた。

感情がコロコロ入れ替わっているようだ。

困惑、思考、判断。そしてセイバーの方に顔を向け、言い放った。

「この子はセイバーと士郎の子供ですか？」

空気が凍ったのは、おそらく近くを通りかかった一般人ですらわかったのではないだろうか。

確かに私の年だと誰かの子供だと間違えられても無理はない。

そしていわゆる日本人ぽくない顔と、セイバーの容姿に少なからず近づいてきてきたのもライダーの結論を助長することとなったのではないだろうか。

確かに義母と義父の子供には見えないだろう。

遺伝が違う。

銀髪など外国の因子が入っていないければ出るはずなどない。

ただ。

私はみた。

『子供ですか』発言の後、こちらをまるで穴があくように見つめる彼女の姿を。

身の危険をすぐさま感じ、義父に駆け寄ろうとするが彼女はその義父の側にいる。

ならばとセイバーの元へと駆け寄った。

普段ぐーたらしてても剣を担う英霊の一角だ。

窮地になっただけ仲間を守ってくれるはずだと。

「ま、待ちなさい、ライダー！ それは大きな誤解だ！」

「何を恥ずかしがるのですか。男と女がいれば、子供は自然にできるといふものです。そうでなければ士郎が旅先で作ってしまったのですか？」

絶句。

そついつにふさわしいだろう。

義父はもう動かない。

ギシギシと音を上げて締められる背中が痛ましい。

勝手に話を進められてセイバーも焦っている。

このようなセイバーを見るのは珍しい。

「ところで、ライダーと言うからにはあなたもサーヴァントですか？」

疑問を口にする。

話題転換の要素が強いが、ずっと気になっていた。

「ええ。桜の中に疑似聖杯が残ったままでしてね。私はそれにより現界としています」

「ふうん。じゃあさ。他のサーヴァントも呼べちゃったりするの？」

「………どうでしょうか。聖杯としての機能は桜には有りますが、召還機としての機能はないかと」

なるほど。

だからライダーは現界しているにも関わらず桜が魔力不足で倒れることがないのか。

「それに、正直ライダーには助かってますよ。私の中で魔力が暴れて、サーヴァントを使役しておかないと際限なく増えていくので」

義父を締めながら桜は補足の説明を付け足す。

それは竜脈から再現なく魔力を引き出してしまふ私と似た状態だということだろうか？　だとしたら慣れないとつらい。

「とりあえず家に入りましょう。このままじゃ休めるものも休めないわ」

義母がそう締めくくり、桜は名残惜しそうに義父を離す。

「……………それと、セリム。間違っても私と士郎のことを義母、義父とか呼ばないでよ？ 桜の前でそれはタブーよ。凜と士郎。そう呼びなさい」

「……………じゃあセイバーがお母さん？」

「……………はあ。セイバーは普通にセイバー。分かったわね？ 分かったと言いなさい」

「分かった」

「宜しい」

義母……………凜はそういうと私を解放して中に入る。

家主である士郎の意見をガン無視して進められる話に士郎が不憫に思った。

「大丈夫？ 士郎」

「ああ。大丈夫。俺も何とかやっていくから……………」

そのまま消えてしまいそうな士郎と一緒に、衛宮邸へと入っていた。

「あら、いらつしゃい」

「おじゃましています。士郎」

中には男装の麗人とシスターがいた。教会のシスターさんだ。

「あんたたちが何でいるのか、聞いていい？」

顫かみに青筋を浮かべ、凜はそういった。

桜は後ろの方で苦笑い。

ライダーは我関せずと本を開いて適当な場所に座って呼んでいる。

先に声を上げたのはシスターさんだった。

「私は定期報告にきただけよ。セカンドオーナーがいないから、血筋的な後継者であるこの子に報告する義務が私には有るでしょう？」

人を食ったような笑みを浮かべ、シスターは答えた。

「そ。カレンの事情は分かったわ。それでバゼットは？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・言にくいのですか」

ちらりと士郎を見る。そして困った顔を凜に向けた。

どうやら、士郎にはあまり聞かれたくない類の話のようだ。

「OK。後で聞いわ。・・・・・・・・じゃ、私部屋に戻って休んでる

から。時差ボケが厳しいようだったら士郎もセリムも寝ときなさいね。それじゃ……………」

大きな欠伸をしながら凜はでていった。確かに時差ボケはあるな

士郎も少し電車の中で寝ていたが、安眠できたというわけではない。

だが、その前に風呂だ。

イギリスではなぜかお風呂ではなくシャワーしかないから士郎や凜に聞いたお風呂というものに興味がある。

「どうする、セリム」

士郎が今後の予定を聞いてくる。まあ初めて使うものだし、士郎に教えてもらうか。

「風呂に入る。いこうか、士郎」

士郎の手を取ってお風呂場に行こうとする。

しょうがないと士郎も腰を上げ、洗面台まで案内しようと立ち上がると10の瞳がこちらを射抜いてきた。

ぱつと居間に目を戻すと、セイバー、桜、ライダー、カレン、バゼットは信じられないかのような目をこちらに向けている。

「男女がともに風呂に入るなど、正気ですか？」

「ま、まさか、先輩だったらセリムちゃんといつもお風呂に入っているんですか!？」

「なんと。まさかセイバーからあのような奔放者が産まれるとは」

「まあ、お盛んなことね。猿のように励むのかしら」

「ふ、不潔です！ シロウ君！」

なんともまあ、士郎が糾弾されている。

詰めかける女性陣に士郎もどうしたものかと目を向ける。

一部ライダーの発言でセイバーから殺気が漏れたが、ライダーは澄ました顔をしている。

大物だと思った。

「みんな何か誤解しているようだが、私は士郎に風呂の使い方を教えてほしいだけなんだが？」

何せここに来るのは初めてだ。

間取りも知らない。

風呂の使い方也不知道では話にもならない。

自分たちの妄想ともいえる考えを暴露したことでセイバー、並びに桜、バゼットは顔を赤くしているが、ライダーは普通、カレンは少し残念そうだった。

なぜに？

「士郎、みんなどうかしたのか？」

「残念だが俺には分からない」

鈍感タッグはそういつと居間からでていく。

中からため息が聞こえたのはそのすぐ後だった。

R u t e 1 - 3

深夜。

士郎と一緒に誰が眠るかで揉めていたが、結局は私に落ち着いた。

誰かの服を持ってなければ安心して眠れないと言う困った性分なので今日も士郎に抱きついて寝ている。

その行動を恨めしそうに桜が見てきたが、セイバーも凜も慣れているのでスルー。

たまに彼女たちとも一緒に寝ているのだが、そのときにも抱きついていてふしだらな行為には見えなくなったのだろう。

「・・・・・・・・」

私は慣れない環境故か、それとも仮眠と称して4時間ほど寝たか。どちらかの理由によって深夜に目が覚めた。

ついでにおしっこに行きたい。

ぶるりと震えるが、トイレの場所が分からない。

いや、正確に覚えていないだけなのでいつかはたどり着けるだろうが、夜中に動き回るのはこう、なんというか、怖いのだ。

以前、夜中に眼が冷めてしまった私は偶然見てしまった。凜の魔術師としての顔を。

能面のような無表情、そして魔術について本を広げる凜は格好よかった。

しかし、急ににへらつと笑ったかと思うとだらしない顔になり、引き締めたと思えば顔を真っ赤に染める。

そのような意味不明な行動に、なぜか恐怖を覚えたのだ。

起きていることがバレれば、ヤラレルと。

以来、早く寝るように心がけてはいるが、夜中に目を覚ましても歩きたくないのだ。

偶然あのヘブン状態の凜を見かけてしまったらガンドを打ち込まれそうで怖い。

凜は恥ずかしさを紛らわすために制御度外視のガンドを打つ。

効果は一週間の風邪だ。

余計なことに巻き込まれたくはない。

しかし、私の膀胱は待ってくれない。

女のプライドで庭にするのは避けたい。

なら隣で寝ている士郎を起こすのは仕方ないことなのである。そう、仕方ないことだった。

ゆっさゆっさと揺らすと、案外浅い眠りだったのか士郎はすぐに目を覚ました。

「……………どうかしたのか、セリム」

少し眠そうに起きあがると士郎はこちらに問いかける。

迫って来るものと膀胱の具合を考慮すれば、伝えるには早ければ早いほどいいと思う。

「おちっ」

だから寝ぼけていたとかそんなことぶっ飛ばして用件を簡潔に述べた私は、後に羞恥に悶えることとなった。

このとき、もう少し考えていればと思ったことは後にも先にもない。

「分かった・・・・・・・・えと、トイレは廊下の突き当たりに・・・・・・・・」

「怖いから、ついてきて」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かった」

なぜか笑いをかみ殺しながら、士郎は先導するように私の前を歩いていく。

「なにがそんなにおかしいの？」

「いや・・・・・・・・おまえは普段しつかりしているくせに、たまに子供に戻るんだなと思ってな」

「・・・・・・・・悪い？　しろーだって人のこと言えない」

「悪くはない。ああ、それが自然なことだ。本来ならお前はそうあるべきだったんだ。魔術なんて危険の伴う物に手を染めるんじゃないくてな」

士郎にだけは言われたくない。

危険な状態になっても、彼には成し遂げたい願いのためなら自らを切り捨てる。

それは壊れた人間だからこそできることだ。

衛宮士郎という人間も本来は魔術などと関わるべきでない。

人が助けたいなら消防士なりレスキュー隊なり、道だけなら無数にあった。

それを魔術しかないと思いこみ、または彼の命の恩人がそうであったように。

士郎は魔術でしか人を救うことはできないと思っている。

魔術が危険だというなら、士郎こそ手を染めるべきでない。

「まあ、いいんじゃないか。そんな道があっても。危険だからなんていったら、危険じゃないことの方が少ないだろうし、お前はまだ5歳、いや、もうすぐ6歳か。生きること、つまりは自衛の為の魔術だ」

「……いつかハルケギニアに戻らなくちゃいけないからね」

「そうだな。あの世界は人に優しくない。だからこそ遠坂も俺も、お前を鍛えたんだ。すぐに戻してもお前は非力な女の子でしかないかったんだから」

むつと顔を歪ませる。

3歳児だった私に士郎はなにを求めているのだろう。

それは、確かに自我は有った。

言葉を話せた。

それだけだ。

魔法を放たれれば傷つくし、痛いのも嫌だ。

平和に暮らしたいから魔術を習うという矛盾した行動は自覚している。

だが、そこに生き残れる手段が有るのなら私は一つ残らず吸い込みたい。

その願いの、平和に暮らしたいという想いの、何処を否定できるというのか。

「力はただの暴力だ。それはどんな力であつてもな。守るためには相手を傷つけなくてはいけない。それは平和を望むお前に誰かが恨みを持つと言うことだ。力はな、正義も悪もない。たったそれだけのことに気がつくのに、俺は9年もかかってしまったがな」

士郎は寂しい目をするだけだ。

力には責任がある。

士郎の力は剣を造ること。

剣とは守りの象徴でもあり、戦争の象徴でもある。

剣を交わらせば誰かが死ぬ。

衛宮士郎は、その傷ついた者も救おうとする。

幾つもの人を守れば、相手を不幸に晒してしまう。

それでも士郎は助けを与える。

平等に、均等に、貴賤なく。

一人を殺せば十人が助かるのなら、士郎は躊躇しない。

それが、数年前までの衛宮士郎だった。

「お前には力がある。だから見極める。お前の力が、分不相応ではないか。過ぎた力は身を滅ぼす。お前は確かに聡いが幼い。危ないと思えば逃げる。分かったか？」

「言いたいことは分かってるけど」

「ならいい。勝手に突っ走られるよりはフォローしがいがある。まあ、俺が言えた義理じゃないか」

気がつくと、トイレは目の前だった。

士郎は壁に背中を預け、電気のスイッチを入れる。

「ほら、早くしないと漏らすぞ？」

「！　　デリカシーがなってないっ！　もうっ！」

ボタンとドアを閉めてさっさと済ます。

まったくもう、士郎はいつもそうだ。

皮肉っぱいし意地悪だし、でも根は優しいことを知っている。

だから強くはでれない。

今でも凜を起こしたら般若の形相で「一人でいけ！」と言われるところを、わざわざついてきてくれるし待っていてくれるし、嫌な顔ひとつせずに物事を引き受けてくれるのは士郎の美德だろう。

ちゃんと後始末を終えてドアをあける。

月を見上げながら士郎はやっぱり立っていた。

「ん、終わったか？」

「うん」

「そうか。じゃあ戻ろう。夜はまだ冷えるぞ」

そつと手を取る。

これだ。士郎はたまに、私を子供扱いしてくる。

凜も、セイバーも。

女性に対して甘いというか何というか、不安なときに、少しの優しさを分けてくれる。

手を握ったり、頭をなでたり。

最初は天然ジゴロかとも思ったが本当に天然で邪気がない。

故に拒むこともできずそのままだ。

女たらしめと言う言葉は、この家に住む男女比が如実に表されているだろう。

士郎という男一人に対して。

私、凜、セイバー、桜、ライダー、カレン、バゼットという、1：7の比率。

「士郎」

「ん？ 何だ？」

「モゲロ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男女比を見て私が口に出したのはそんな言葉だった。

この天然ハーレム野郎め。

凜だけでは満足しないと言うのか。

「なんでさ・・・・・・・・」

隣を歩く士郎は、肩をがっくり落としながらそう呟いた。

運命邂逅 5（後書き）

主人公はまだ子供の範疇ですが、考え方は大人に酷似しています。

運命邂逅 6（前書き）

士郎、私に任せてください。現状、わたし一人で十分対処できるかと。

今日のセイバーの名言集。

運命邂逅 6

SIDE バゼット

就活に挑んで4年。

ランサーとの日々を想いながらも今日も今日とて就職活動だ。

これで記念すべき500社目。

さすがに私も挫けそうになるが、一般社会に馴染むためには仕方のないことだ。

「ええっと、バゼットさん。ああ、外国の人ね。女の方……………」

「

面接官はまたもや男、そして私が女であるのになにが不満なのか。

やる気のなさそうな男とマンツーマン。

初めは性根を叩き直すつもりで拳を振るっていたが、さすがにいきなりそんなことはしない。

「大学はでてない……………ええと、失礼だけど特技の『格闘技』ってどんなの？ ほら、いろいろあるじゃん」

「種類など問いませんが、強いてあげればボクシングでしょうか」

「ボクシングね。強いのか？」

「絡んできた悪漢を殴り倒すくらいでしょうか」

「……ふうん。ちなみに何人くらいなら？」

「相手の質にもよりますが、40人くらいなら」

「……」

よし。

これで完璧だ。

なにやらやる気のなさそうな男が急に怯えたが、やはり笑われたのが悔しくて机をバラバラにしたのが原因か。

しかし、他の優位性は男にも匹敵することはうまく伝えられたはず。

ここは普通の商社だが、性質の悪いクレーマー処理などに使われると私は見ている。

これなら合法的に敵をほふれる機会を得、さらに仕事もお金も手にはいる。

やはり拳を錆び付かせる訳にはいかないからな。

「あらあら、どうしたのバゼット。機嫌のよさそうな顔をして」

そんなことを思っているとカレンが来た。

確かに新都の商社であるから顔を合わせるのは普通なのか。

「あなた、まだ就職活動だったのね。プロボクサーでもなればいいのに」

「……………嫌みか？ 目立つと魔術教会に捕まえられるだろう」

「あら、そうね。気がつかなかったわ。じゃあマスクを被れば？ タイガーマスクみたいで面白いわよ」

こいつは本当に性格が悪い。

さすがはあの神父の娘というだけはある。

義手が疼く。

「ああ、それと一言いいかしら」

「……………何だ？ またやっかいごとを頼みにきたのか？」

「バイトよ、アルバイト。短時間で高額、少々命が危険にさらされるかもしれないぐらいでがたがた言わないで」

カレン・オルテンシアは教会からよく仕事を頼まれる。

もつとも、それはここに霊地があり、一番近いのが言峰教会でそのシスターをしているのが目の前のこの人なんだが。

人使いが荒いのだ。

確かに手取り一日百万を越えるお金が手にはいるのはうれしい。

勤務中は長くて一ヶ月もあり、その間の弁当代も出るし、言うことはなかった。

ただその収入源が何処から来るのかを問うたとき、あるうことが銀行を指さし『あるところから持ってくるのが定石でしょう？』と呟いたのは今も忘れていない。

銀行員に暗示をかけ、綿密な行動のもとお金を引き出している。

その銀行員はお金を無断使用したとして逮捕されていたが、事実使っていたお金はせいぜい100万。

だが銀行の損失は3億だ。

残り2億9900万はいつたい何処に消えたのか。

『これであなたも共犯者』

以来、カレンの手伝いは一切していなかった。

「やれやれ、頭の固い連中はこれだからいけないわ。流通が社会を潤わせるのよ。つまりは貯めるよりもこうして使ってあげる方がお金も喜んでくれるわ」

「不祥事が起こった銀行が取り潰されてもか？」

「これも報われない人の人助け。シスターに必要なのはただ人を導くことよ。それ以外、たとえ救われた人が警察に連れていかれても、バレなきゃその人は救われた自覚を持っているだけ。私が救う。私が殺す。それこそが私の在り方。ねえバゼット。そんなあなたは賢い人間でしよう？ ほら、お金よ？ 必要じゃない？ さあ、少しお手伝いをしてくれないかしら？」

いやな目をするカレン。

私は金の亡者ではない。

確かにお金は食物を買う上で重要だが、別に金慾に捕らわれているわけでもなし。

「断らせていただく」

だからカレンの言い分は通らない。

「そう」

残念そうな声色だが、顔は被虐に富んでいた。

恐ろしい、そう思ってきびすを返し、カレンから距離をとる。

「残念、本当に残念ねバゼット。あなたは愚かな人間になってしまったのね」

「何とでも言え。私は堅実に働くぞ」

「次あうのが独房なんて、世界は残酷ね」

・・・・・・？ 一瞬思考が止まってしまった。

「まあ、そうよね。私はお金で救われた人が警察に連れていかれても、バレなきゃいいんだもの」

その言葉の真意をはかりかねた。

カレンはなにが言いたいのか。

「ねえ、力を貸してくれないかしら。バゼット。国家権力の前にあなたを突き出すというのは少々残酷だと思うもの」

「・・・・・・カレン。なにが言いたいのか図りかねますが？」

「あの銀行員がそんな供述をしなければ私はお金をまるまる使えたのだけれど。でも2億9800万の残りの行方を未だに警察は追っているのよ。だから、デコイが必要だとは思わない？」

2億9900万では？ と思ったが、以前請け負った仕事・・・・・・
・・一週間の教会護衛を思い出す。

紛れ込んだ死徒を追い返すというもの。

辛くも退け、100万円を私は受け取った。

100万。

それが意味するもの。

考えたくないことが頭に思いつき、顔から血の気が失せていった。

「貴様、私を脅迫するつもりか!？」

「脅迫なんて。歴とした仕事じゃない。ねえ、ビジネスパートナー？ いえ、相棒かしら？」

「ふざけるな！ そんな契約を交わした覚えは……………」

……………契約をカレンは取り出した。

強制執行文書『ギアススクロール』。

魂に刻み込む類の、魔術的に絶対に逆らえない契約書としては最高位の物。

そこには自分の指紋が捺印代わりに押されている。

少し黒ずんでいるところを見ると、まるでインクの付いた紙を押しつけて出来上がったような、そんな印象を与える。

私はそんな契約を交わした覚えは無かったが、頭に嫌なことが思いついた。

前日。

死徒を退ける際に交わした簡易契約。

その下にあれを仕込まれていたとも考えられる。

それよりも日本のビザを発行してもらった際にカレンを経由したあれか？

それとも身分証が使えないためにカレンを経由して入手したときか？

・・・・・・・・。

いや、機会は全部だ。

迂闊にカレンに頼った私の落ち度か。

はは、空が青いな。

「わかりました。まことに不本意だが、私は捕まりたくはない。契約を交わそう、カレン」

「ふふ、信じる者は救われるわ。さて、それで報酬と任務について・
・・・・・・・・そうね」

多少悩んだ後、カレンは思いついたように住宅街を指さした。

「シロウの家で話し合いました？」

S I D E E N D

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

トイレから戻る途中、何となく凜と桜が寝ている部屋をのぞくと、凜がいない。

少なくともトイレではない。

となるとまだ起きているのだろうか。

時計は深夜3時を指している。

魔術の最高潮に達するのは2時だと言っていたが、もしかして台所かな？

「どうかしたのか？」

士郎が私に声をかける。それほど重大なことでもないが。

「士郎、凜がいない」

「遠坂が？・・・。。本当だ。桜しか・・・。。？ん？
ライダーもいない？」

「ライダーもこの部屋なの？」

「ライダーは桜のサーヴァントだからな。兄がいるけど、少し事情があつて入院している。祖父も・・・。。蒸発した」

蒸発のニュアンスがおかしかったが、それはいなくなったのか、士郎が消したのかがわからない。

桜が独りぼちでライダーがそばにいるのは分かったが。

「気になるのなら明日に訊けばいいさ。今日はもう寝よう」

「・・・・・・・・分かった」

釈然としないまま布団に入る。

士郎と私は同じ部屋で寝る。

隣で士郎の温もりを感じながら、その日は寝た。

R u t e 1 - 4

次の日、朝起きると7時を回っていた。士郎はもう起きているのか、台所から包丁を叩く音が聞こえてくる。

のそのそと布団から這いであると注射器を取り出す。モスキート注射なので痛くはないのだが、血を抜くときの脱力感が半端ではない。

巾着をポケットから出すと、血を並々抜き取った注射針から血を巾着の中にある宝石に垂らす。

これはオニキスだ。

しかし、中古の物で値段は凜のものより高くない。

宝石魔術は妥協できないと高価な物を凜は買う。

確かに通常魔力を通すには新品の方が通りやすい。

なぜなら魔術的処理を以前されている宝石もたまに市場にでるが、たいていそういう宝石にはレジストや呪いが働いている。

だからいくら凜だとしても解呪できないし、なにより他人の血がしみこんだ宝石など触りたくないとのこと。

私は逆だ。

中古で人を魅了したこと、魔術師に使われたことのある宝石の方が圧倒的に魔力を通しやすかった。

魔力を上書きするという荒技が可能で、私の魔力は『再現』する魔術に長けているので、宝石の傷なども多少修復することができる。

それに、呪いを包み込むように内包したり、他人の魔力を取り込んで解放する方が楽だ。

凜にいったらどつかれたが。

しかし私の宝石魔術は練度が高くない。

攻撃に使うならガンドの方が威力があるし経済的だ。

凜のように魔術刻印で受け継がれた物ではないために発動までに数十秒かかるが。

魅力的に見せ、人を惑わす宝石にする。

それを転売して利益を稼ぐのだ。

宝石自体には護符だとか魔除け程度の魔術式を組み込んで貴金属
買い取り店に足を運ぶ物もしばしば。

士郎には話しているが、凜には話す機会がなかった。

生成も転売も凜が時計塔に行く間に行っていて、比較的時間が余
ったときに、もしくは血が有り余っているときに定期的にやってい
る。

「・・・・・・・・んっ・・・・・・・・」

私の血が宝石に垂れると、オニキスはより深い色合いを見せる。

先ほどまではひんやりとした表面が熱を持って脈動しているかの
ように熱くなる。

竜脈から取り上げている魔力は地下深くで生成される宝石にとっ
ては相性のいいものだ。

マグマは地球の動脈であり、そこから宝石は生成される。

なら地球の魔力を用いた方が圧倒的にいいのだが、時には私の魔
力に耐えられなかった宝石が暴発する。

端的に言ってしまうえば、内側から破裂して粉々になる。

純度とモース硬度、カラットによって魔力を抑えているが、オニ
キスは初めてだった。

徐々に徐々に込めていき、慣れさせる必要がある。

「熱は収まったけど……」

パタパタとそれを持ち上げて士郎の元へ歩く。

士郎は予想通り台所で調理を行っていた、その隣には桜がいて、居間ではライダーが本を読んでいる。

桜は何か楽しそうだ。

士郎も久しぶりに会った人に会話を弾ませている。

邪魔するのも悪いので、オニキスはまた巾着の中にいれ、ポケットにしまった。

宝石の解析を士郎にお願いしたかったが、こればかりは仕方ない。

桜からまた睨まれるのもイヤだし。

私も居間に向かう。

ライダーがこちらに気づいたようだが、初めて会話を交わす私をどう接していいか分からない様子。

ちらちらとこちらを見てくる。視線を感じてライダーに振り向くと本を顔に押し当て、「私は本に集中しています」といった風を装っていた。

なんか、あわててるライダーってかわいいなあ。

和んでいるとセイバーが居間に来た。

私服に着替えてほんのり汗をかいている。

ということは道場で素振りでもしていたのだろうか。

「おはよう、セイバー」

「おはようございます、セリム。今日は早いんですね」

「いつも寝坊するような言い方はやめて」

「きっかり10時間以上寝ないと起きてこないセリムが言えたことではありません。……。それにしても、ライダー。あなたはあなたで挙動不審ですがどうかしたのですか？」

急に話の矛先を向けられたライダーがあわてている。

「せ、セイバー。挙動不審などとは人聞きの悪い」

「いえ、客観的な意見なのですが。セリムがどうかしたのですか？」

「な、何でもありません。気にしないでください」

セイバーはライダーの態度に疑問符を浮かべながらも座った。綺麗な正座。

そして爛々とした目を台所の二人に向けている。

期待しているのだろう。

久しぶりの士郎の料理だし。カレー以外の。

さすがに4日三食カレーはセイバーでも辛かったらしい。しかもシエルに合わせた激辛カレー！。

基本士郎はふらふらしている。

ゼル爺の頼みごとで急にどこかに行ったり凧の研究の手伝いをしたり、エーデルフェルト家で執事のバイトをしていたり鑑定士の実力を資格もなしにやり遂げる。

借りているアパートには士郎と私とセイバーが在住しているが、セイバーと士郎は凧の従者と言うことで時計塔に出入りできる。

しかし私は完璧な部外者である。

しかし、こちらの世界に連れてきてしまった責任を取ると言うことで住居を新しく登録したのだ。

セイバーの強い希望で道場が近くにあるアパートの一室。

クレープ動乱時には士郎とセイバーは凧が研究室『自室』に籠もるため、言い方が悪いが追い出されたらしい。

自主的に出てきたのだが。

部屋の空気は息が詰まるほどで、4日ほどアパートで一緒になった。

そのときにシエルもついてきたのだ。

というか、凜はシエルの存在が気になって研究に没頭できなかつたらしく、士郎が連れ出す羽目になったというところが濃厚だが。

私は時には一人で魔術の練習を行ったり、士郎が来たときは投影を学び、セイバーが来たときは道場で剣術を見せてもらって素振りをしたり、凜が来たときは宝石魔術やガンドを学んだ。

最近ではシエルに投擲術と式典各種を学んだ。

よく人が入り浸るのはやはり心配してくれているのだろう。

まだ一桁の子供が一人暮らしなどあり得ないらしい。

少しは私も強くなっただろうか。考えているとセイバーが私に問いかけた。

「そういえば、セリムと昨日は鍛錬をしていませんね。お昼は道場で鍛錬でもしませんか？」

「そうだね。やろうか。木刀？」

「セリムはそれなりに動けるでしょう。多少手加減はしますが、実践に慣れていた方がいい。真剣で行いましょう」

回数関係でセイバーの剣術を私はよく見ている。

それを反復、脳内で再生することで、セイバーの技術を『再現』

できることに気が付いた。

初めて再現したのがセイバーの剣術である。

凜は暫定的にそれを再現魔術と呼んだ。

それに肖って私は再現魔術と名乗っているが、認知度は低い。

むしろ認知されてしまえば終わり。

これは士郎の投影魔術と同じ珍しい属性であり、竜人である私くらい膨大な魔力公使ができれば宝の持ち腐れとなる技法。

バレればホルマリン行きは確定。良くて監禁生活だ。

セイバーとの会話に花を咲かせていると士郎が来た。

手には数多くの和食。それが並べられる度にセイバーの目が輝く。

確かに豪勢な朝ご飯だ。

しかし、凜とバゼット、カレンが来ていない。

興奮するセイバーをなだめて、士郎は三人を呼びに行った。

だが、来たのは凜だけだ。どうかしたのだろうか？

「ねえ、凜。バゼットとカレンは？」

「そうですね。まだ寝ているのですか？ 私が文字通り叩き起こし

ましようか？」

セイバーが少し怖い。

凜ははっきりしないのか牛乳をがぶ飲みし、食卓に着くと答えを言った。

「あの二人なら、今朝早くに出ていったわ」

その言葉に、土郎は違和感を感じているようだ。

「あの傍若無人なカレンが帰るとは思えない」

それはそれでどうかと思うのだが。

しかし、教会の仕事もあるし、バゼットは就活で忙しいと言っていたし。

用事があつたのなら仕方のないことだ。

「弱つたな。二人分余計に作っちゃったぞ？」

「土郎、私に任せてください。現状、わたし一人で十分対処できるかと」

かっこいい暴食発言がセイバーから漏れる。

だがもうセイバーの顔に似合わない暴食ぶりは認知されているので私たちは納得して食卓に着く。

「いただきます」

ご飯を食べる。

セイバーの食指はついに止まることを知らなかった。

運命邂逅 6（後書き）

二人分ならセイバーは楽勝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7417v/>

絶望の少女は第二魔法の担い手と会う

2011年10月19日09時23分発行